

2019年度活動報告

今年度は富本憲吉をテーマとした2つの展覧会が開催されました。2019年6月29日から9月1日まで「企画展 富本憲吉入門—彼はなぜ日本近代陶芸の巨匠なのか—」が奈良県立美術館で開催されました。富本憲吉が評価をされている理由を分かりやすく紹介するという画期的な展覧会です。本学の芸術資料館所蔵の富本憲吉アーカイブから、富本がバーナー・リーチに宛てた書簡より、1915年に富本が安堵村に立てた新居の周辺と間取りを記した図が展示されました。

10月9日から12月19日まで「特別展 富本憲吉と會津八一～孤高の美の求道者たち～」が新潟市會津八一記念館で開催されました。富本と書家 會津八一（1881-1956）との交流や、周辺の作家たちに焦点をあてる初の試みです。富本は八一の最初の歌集『南京新唱』の挿絵を描き、八一が愛用した磁印「朔」「秋草堂」「渾齋」を制作しています。本展の図録には芸術資源研究センター客員研究員の前崎信也が「富本憲吉が気になる人に伝えたいこと」を寄稿しました。

さらに9月28日から11月3日まで「京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展：still moving library」が、ギャラリー@KUCAで開催されました。ここでは芸術資源研究センターが刊行した『富本憲吉 わが陶器造り』（里文出版、2019年）を題材にした展示を行いました。富本は学生のために書いた『わが陶器造り』の中で、本学所蔵の野々村仁清・尾形乾山の作品についてコメントしています。そこで、展覧会場では両作品とそれらに対する富本の言葉を展示しました。

書簡を中心とする辻本勇コレクションの整理は継続しています。来年度には詳細な報告を発表できるように進めています。

山本真紗子（芸術資源研究センター非常勤研究員）